

Eureka III

六年制通信 No. 11 平成 27 年 6 月 13 日 (土) 号

最後が肝心

物事は何でも最後のツメが肝心だ、という話は今までも何度か耳にしたことがあると思います。スポーツを観ていると終盤の逆転などはよくあることで、最後に気を抜くと、それまでの努力が無駄になってしまいます。逆に、前半に大変な苦勞をしていても、終わりがよければ、つまり勝てば、それまでの苦勞が報われます。「終わりよければ全てよし」のような、それまでの努力はどうでもいいのかと言いたくなるような、そんな諺もありますね。英語では *All is well that ends well.* と言います。ついでに「はじめ半分[出だし]がよければ半分終わったようなものだ」は *Well begun, half done.* と言います。ゴール寸前の心の隙を戒める表現は古くからあって、芥川龍之介の好きな「百里行くものは九十九里をもって半ばとせよ」が有名ですね。最後の一里でつまずくな、目的地が見えてきても、まだまだ道半ばだと考えて気を抜くなということでしょう。いい言葉だと思いませんか。英語にも最後の最後に油断をすると折角の努力が無駄になるということを表す面白い表現があります。 *There is many a slip between the cup and the lip.* といって直訳すると、カップと唇の間には多くのスリップがある、と。面白いでしょ。スリップとは「すべること」です。コーヒーか紅茶か知らないが、お湯を沸かしたり粉を準備したり時間をかけて用意したのに、いざ飲もうとした瞬間カップと唇の間に「すべり」があるぞ、けっこうあるぞ、と。最後にほっとして油断したらカップを落として台無しにしたりすることを注意しているのです。

さて、6年生はセンター試験を控えています。先日1月16日17日の実施が正式に発表されました。まだ、夏休み前ではありますが、受験生にとっては「目の前」にセンター試験が迫っている、そう考えなくてはなりません。6年間の勉強を考えてみれば、この時期は最終盤と言っていいでしょうからね。油断せず、勉強を続けてほしいと思います。 *Well begun, half done.* だった人もそうでなかった人も、 *All is well that ends well.* であってほしいと心から願います。

ところで、甲子園やインターハイでの活躍が注目される中、よく監督の先生方は「勝敗も大切だが、生徒にとっては1回きりの大会なのだから、悔いのない試合に」と考えるようです。しかし、生徒にとって本当にたった1回きりの大会は大学受験です。甲子園は4回も5回もチャンスがあるのですから。君たちはこの6年間、全く試合をせず、6年生の冬になっていきなり真剣勝負をするのです。しかも、試合会場に向かうまでは団体戦で勉強をしますが、会場に入ってしまうと孤獨な個人戦のみです。本当に大学受験とは過酷だと思います。ただし、この受験制度は非常に平等だとも言え

ます。自分の努力が反映されるという点で平等だと、そう考えていいと思います。

努力といっても今から別に特別なことをするわけではありません。要は繰り返し繰り返し問題を解いたり、暗記したり、時間をかけて同じ事を行うだけです。定着するまで繰り返すだけです。繰り返すことを英語では **repeat** と言います。re-は **again** すなわち「再び」の意であり、peat はもともと ‘**attack**’ の意味です。**attack** はアタック、「攻撃する」で、例えばディナーをアタックする(**attack the dinner**)とえば、食事にむしゃぶりつく、という意味になります。繰り返すとは、何度もしつこく攻撃を加えるわけですね。「繰り返す」とは、ただ演習をこなすのではなくて、むしゃぶりついて頑張ることを言うのです。

そういった努力を続けて初めて、私たちは諦めることができます。こんなことを言うとか変な気がするかもしれませんが、私はそう考えています。「諦める」とは、物事を「やめろ」と言って投げ出すことではありません。「諦める」は「明らかに見る」という意味です。「よくわかる」、難しく言えば、「悟る」という意味です。精いっぱい努力して初めて、私たちは自分の力を知るのであります。平たく言ってしまうと、私たちは自分の能力を「諦める」ために勉強をしている、そう考えていいと思います。そして、この「諦める」行為は、きわめて個人的な問題です。自分だけの問題です。わかりませんか。自分の力が本当によくわかれば、長所も弱点も理解でき、これからの努力の方向も見えてくるはずであります。自分の取るべき選択も見えてくるはずであります。その選択の幅を狭めなくていいように、今、君は勉強しているのです。

ユーモアについて

Humor (humour) は、ラテン語からフランス語に入ったのですが、もとは何と「液体」の意味でした。驚きますよね。綴りも本当は **h** がなく、**umor** だったので、**humus** 「土」の類推から語頭に **h** をつけたと考えられています。ちなみに、この **humus** から造られた生物を **human** 「人間」と言います。また、**humus** は、ちょっと中学生には難しいですが、**humiliation** 「屈辱」とも関係があるんですよ。

中世医学において、この語は人体構成の四つの基液を意味するようになりました。血液 (**blood**)、粘液 (**phlegm**)、黄胆汁 (**choler**)、黒胆汁 (**melancholy**) を指しました。実際には、体内に **melancholy** と呼ばれる物質は存在しません。そして、血液が多いと快活に、粘液は鈍重に、黄胆汁は怒りっぽく、黒胆汁は憂鬱に（日本語で言うメランコリー）なると考えられたわけです。ですから、この4液のバランスがいい事を ‘**in a good humour** =機嫌のいい状態’ と呼んだのです。16世紀に入り「むら気」⇒「風変わり」⇒「ユーモア」と、今日の意味へと変わっていきました。ちなみにシェイクスピア (1564~1616) にはまだ ‘**the humour of the dank morning**=じめじめした朝の湿気’ のように「液体」の名残が見られます。

英語の好きな人は、**sanguine** を引いてみるといいでしょう。この語はラテン語の「血液 **sanguis**」から来たのですが、血の気が多いというのは西洋では元気がいいことなんですね。